

4

重症心身障がい児(者)のための衣生活向上プロジェクト —脳性麻痺患者が院内で利用する衣料品デザインの提案—

岩手県立大学盛岡短期大学部 准教授 佐藤恭子、講師 齋藤愛
独立行政法人国立病院機構盛岡医療センター 主任児童指導員 小山直也
生活科学科デザイン専攻1年(2022年度) 秋本 玲奈、上方 明梨、瀧本 百夏、
千葉 美瑠、堀口 紗希、松森 咲良

該当する
原則

原則9：持続可能性を推進する

1. 活動の概要

重症心身障がい児(者)は、身体の変形や拘縮の症状が著しく、患者の症状もさまざまであることから、患者の症状や、年齢、好みに合わせて衣服を選択することが容易ではない。そのためサイズの大きな既製服を代用したり、家族が家庭裁縫で作ることで身体に症状に対応させた衣料を用意しているのが現状である。重症心身障がい児(者)は病院内で過ごす時間が多いにもかかわらず衣生活は画一的であり、「衣」の分野は「食」や「住」分野に比べ取り組むべき課題が多い。

岩手県立大学盛岡短期大学部生活科学科生活デザイン専攻は、国立病院機構盛岡医療センターの依頼を請け、重症心身障がい児(者)の衣生活向上へむけたデザイン・制作に取り組んだ。この取り組みは、生活デザイン専攻の被服を学ぶ有志学生6名、医療センターの児童指導員、看護師、保育士、教員が協同し、患者の個性や特性に合わせた介護衣料のデザイン・制作を実施した。制作については、患者1名に対して学生1~2名を組み合わせ、症状に合わせて患者が必要なアイテムを制作した。完成した制作物は家族・職員を病棟に招いたファッションショーで披露した。またプロジェクトは学生が患者の衣料を制作するだけでなく、病院職員や患者家族等が障がい配慮した衣服等を再び考える機会となること、学生等との交流を通して患者のQOL(Quality Of Life)向上に資すること、学生が障がい者福祉に関わる機会を持ち、障がい児(者)や地域における共生社会への理解を深めることを目的として実施した。

2. 活動内容と効果

(1) プロジェクトスケジュールと制作工程

プロジェクトは表のとおりスケジュールで実施された。デザイン案の作成に要した時間は週に3~4時間、

本制作の作業時間は週に6~7時間程度を充てた。またコロナ禍のため、病院内に赴き、対面で症状の確認や実測を行うことが出来なかったため、児童指導員や、看護師、保育士らと密にコミュニケーションを取りながら制作を進めた。

表1. 活動スケジュール

実施時期	活動内容
7月	企画説明会 (Zoom)、有志メンバーの決定
8月	児童指導員による重症心身障がいに関する勉強会 (Zoom)、病状や身体症状に関する自主学習 (コロナ禍により、院内での症状確認、実測は中止)
9月~10月	企画・制作アイテムの決定→デザインの検討→デザイン案の確認と調整
11月~1月	パターン(設計図)の作成→試作品の確認と調整→生地を用意と本制作
2月	最終確認→微調整→制作物の完成、制作物の説明資料の作成
3月	納品、院内でのファッションショー→評価

①企画・制作アイテムの決定

対象となる患者および制作アイテムは、医療センターの提案をもとに決定した。その際、児童指導員に病状、行動障がい、サイズ、好みなどをヒアリングし、デザイン案の作成の基礎情報とした。

制作アイテムは、介護用ミトン2種、介護用つなぎ、腕保護用アームカバー、ウロバッグ(蓄尿袋)のためのカバーバッグの5点である。

②デザイン案の作成および確認と調整

素材、形、色、ディテールなど細かな計画をたて、症状や行動障がいと合わないところがないか、介護者の操作は容易かなど、院内関係者との話し合いやメールで複数回の打ち合わせを行って決定した。

③パターンの作成

設計図となるパターンは、市販されているものや、実際に使用している衣料品を計測し、その値をもとに作図した。その際、着用予定の患者のサイズに合わせて作図

を行った。

④試作品の確認と調整

全てのデザインは、粗布で試作品を作成した。試作品は院内関係者に確認してもらい、調整しながらデザインの最終決定を行った。

⑤生地を用意と本製作

生地を選定は、患者の動きや、入院時に相応しいかなどを院内関係者に確認を取りながら決定した。本制作では、縫製箇所が身体に負担がかからないか、細心の注意をして制作した。

(2) 成果発表としてのファッションショー

完成品は、院内で行われたファッションショーで披露した。ファッションショーには、プロジェクトに関わった学生および教員、病院内関係者のほか、観客として重症心身障がい児(者)の病棟の医師や看護師、着用対象者となった患者の保護者らが参加した。

(3) 活動の効果

有志学生は、コロナ禍で、病院に入ることや、患者に接することが出来ないなか、病院関係者からのレクチャーと自主学習をもとに患者のことを第一に考えてデザインを検討した。この活動は学生の福祉への関心を深める機会であり、多様性を意識したユニバーサルデザインの実践となったといえる。実際に学生が制作したものは、介護用のもものではあっても、生地や形などでデザイン性のあるものとなったが、ファッションショーの反響は大きく、保護者の方々からもこの取り組みを高く評価

していただいた。病院内の衣料は、病状や衛生面などを考えて画一的になりがちである。しかし、病院で多くの時間を過ごす重症心身障がい児(者)の患者にとって、またその家族にとって学生の考えたデザインが病院内の衣生活向上の一助となることを願う。



ファッションショーの様子



制作風景



デザイン画と完成品の一部